朝鮮暴徒實記初篇
岡田版
上ノ巻

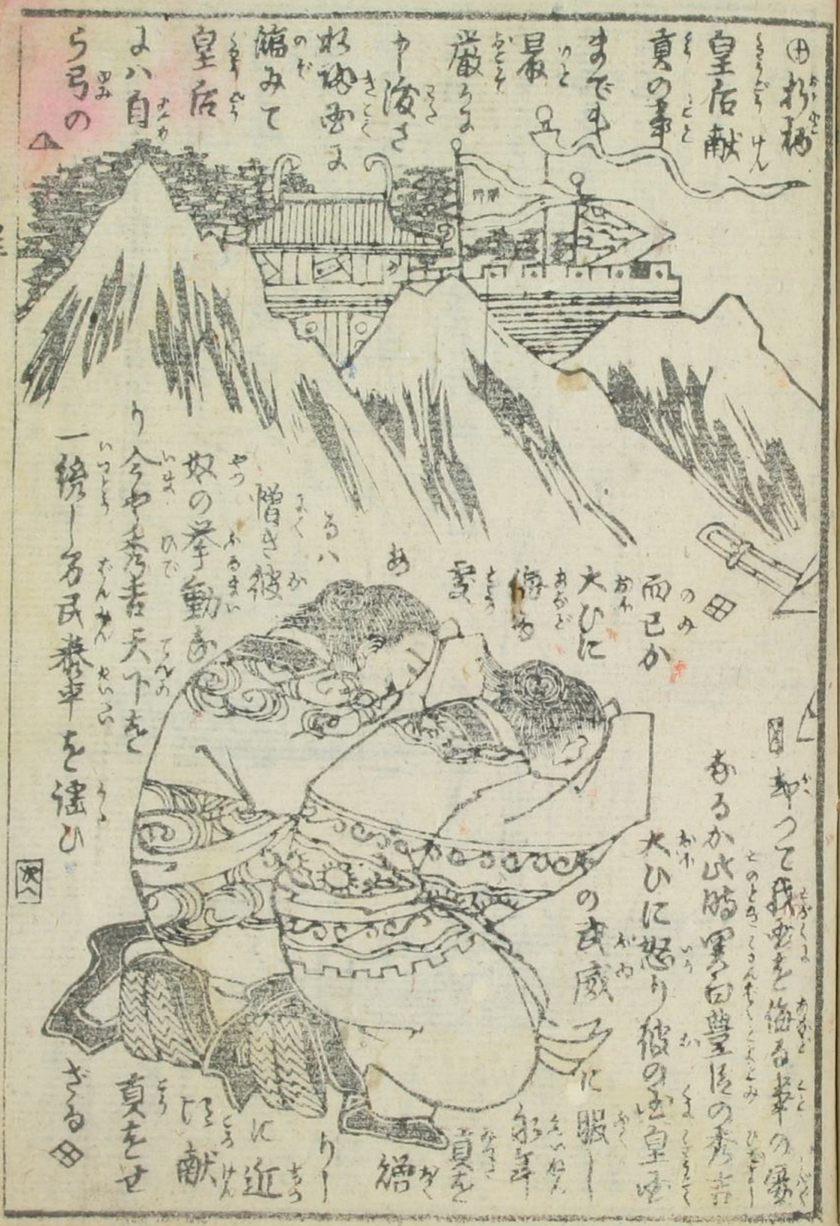
新羅高句麗と朝鮮との高麗よ
りは交際を絶ちて古
中華国の如くを挙げまい
人皇十六代仲哀帝の御宇
西海に賊あり帝暴逆を
逞ふ帝崩を招
すよりて仲哀天皇自
ら征軍を率ひ征討
バさせらるる途中に於て崩御
あり皇后神功皇后の御計ひ
て帝の喪を発せず大臣武内宿禰と
軍議の上后はつづうに斧鉞をとり

A547
1
<48-83987>

西海の城を平げ給ひ
南方の根を断ん
と三韓に押渡り

先を以て三韓王ハ
我国の招命なりと
巖石に刻し率
ゐる玄を引縄め
目出度四海あり
りるが彼の西王ハ
固より伺れも日
本の武威を恐れ
を奉り年々貢を
奉りしが後数百
年を隔るにをひて
守り貢を怠るのこと

皇后献
貢の事
すでに
暴
厳うよ
海さ
好物をよ
編みて
皇后
よハ自
ら弓の



あるか此時豊臣の秀吉
大ひに怒り彼の西皇の

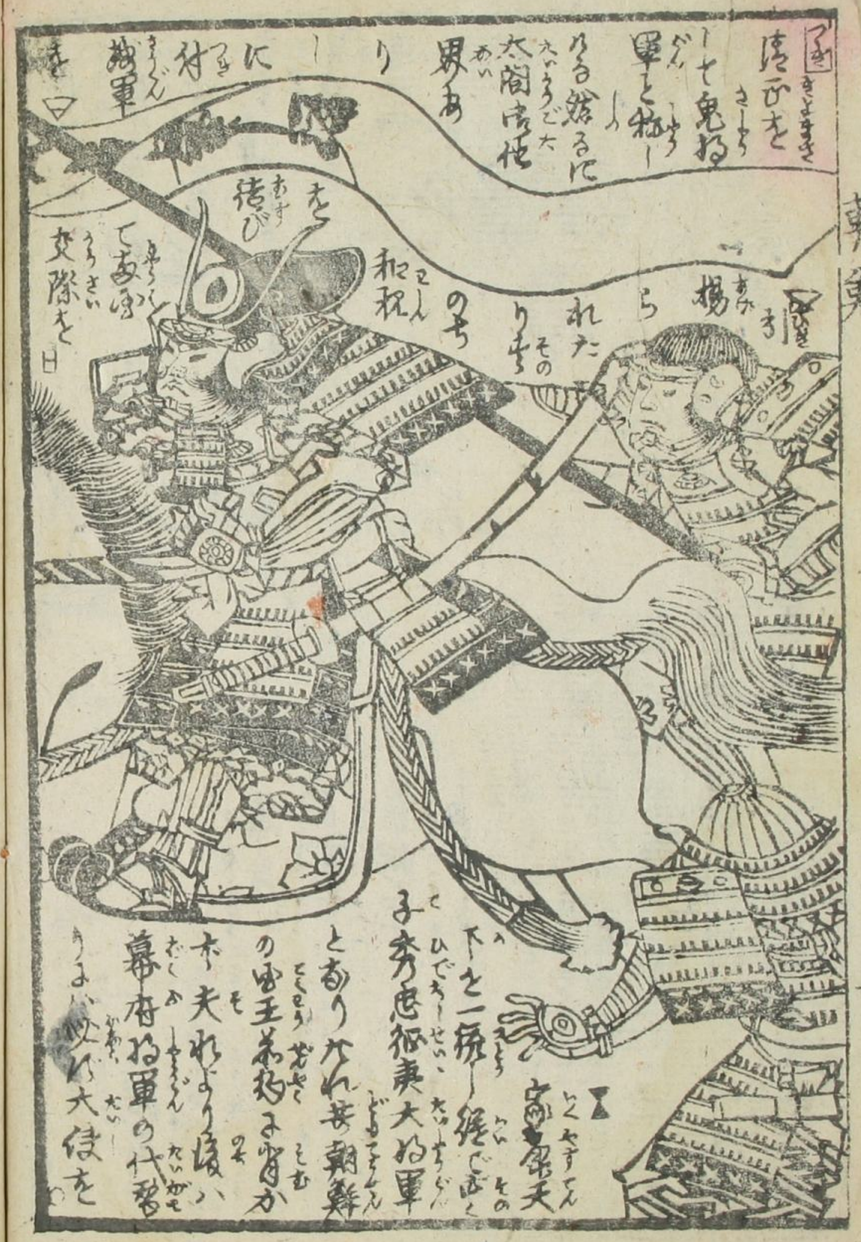
諸軍の斧鉞を落るや朝鮮ハ
接近の西南ハ後の患ひを除き
我英名を海外ニ輝かし
昔ニ勝る日本の武威を
示さんと文禄年号征
討の大軍を起し軍
艦数百艘に乗せ釜山
浦ニ上陸させたり此時の
先鋒ニハ加藤清正
清正ハ西根津右衛門
長等と共に進み嶮岨
を越へ城域を陥す

◎この時ハ已に
王城も早
陥んとする
その勢ひ
実に大明の
軍兵数
十万雲
霧の如く
に押寄せ
来れど

◎勇猛に
思怖を知らず
方々ニ散乱
するぞ尚わ
ざ
を
退ひ
ける
を
捕
にす

大軍を迎へ
の軍勢ハ裏を必死と踏歩り
中にも加藤清正ハ寡兵を以て大敵を破り
ニ並て八人号業と八人号業と故ニ彼の地ニ

黒田長政
政茂軍
長福島正則
清正小早川隆景義堂
津義弘小早川秀
長等の猛将先を争ひ
奮戦するに明軍多
くの軍勢ハ敗走
軍敗れ殺せしが累て彩色の
ニ攻保りしも日本


清正を
して鬼神
軍と称し
る始るに
太閤時代
男あ
り
に
付
越軍
を
清び
和睦
の
れた
ら
揚
の
交際を日
下を一統し給ひ
秀忠征夷大将軍
とあり
の西王母より賞か
木下夫れより後ハ
幕府将軍の代替

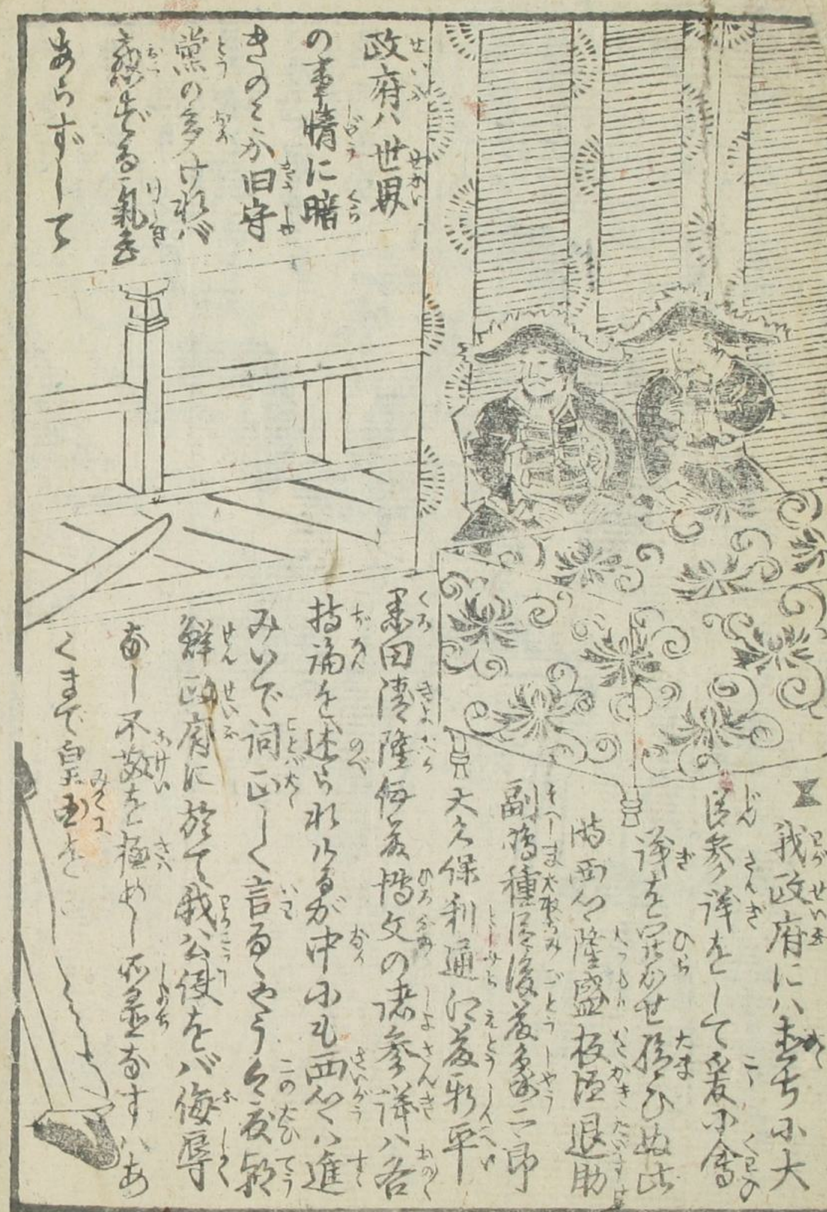
東西と八方
徳川家の代
と相成り
朝と
貿易あり
朝鮮人来
より百九十有余年を過き嘉永
安政の頃に至り徳川家の政権も衰
たり此時に方り相模浦賀へ米
國の軍艦の渡来し貿易の事を
我ひ出しが又此時より引続き英佛
魯の三国等より何れも幕府へ申せ
すに拠て幕府小倉へ止を以て武威横暴に

海外貿易を許されたり又薩摩方より侍番をくハ
主張し幕府をうくんと　の招軍と
居たり然るに　密かに會
議を開き
朝廷の忠廟祥に　十五代
於ける攘夷の　王攘夷の説を
議論如何あるべ薩長の二藩ハ勇み　内大臣より任せられる為れ
怒びます〳〵武徳を厳にあ〳〵薩番ハ　どの
英祖を撃ち長藩ハ又外国の商　虚を伺ひ　各藩服
せ　その
せ　から外
ず　の事務多端にして政府の一

敵を砲撃し生害朝廷を奉
ぜ〳〵ずとの由〳〵を練り武器　て
を鋭くして義勇あり　れあり明治
徳川十四代の招軍家茂朝　遂に出されバ疾くも怪る事あり
廷大坂に於て薨去　奉還しなり之
ありしに一橋慶　維新の
喜を以て　時代と
政諸を看るの　ハあれ
一共に偽よ西の浸策を計らんとて外勢大函の　政府ハ西不普年の　如く
丸山作樂者を以て偽信使　り美
と　ま

朝鮮国に遣はされ
ハ明治六年の夏
にて九山氏ハ
彼の国れを至
り朝鮮
の大夫に面
接し又改めて言
葉やう今夏我の光国に
来りて入れるハ余の使ハ
非ず今や日進月化の時あて我日本
よおひても欧米各国と條約を
結び貿易の

乃を異
さ一
り独り
光国と我国と
ハ未だ定まる
結約も無く
に是を
去遇た
れど古へ
よりの交
隣也よし
今の彼方
方
たがひ
▲賀易
乃を異かる
と最愚説に述
▲ならるが朝鮮



政府ハ世界の事情に暗きのゑか旧守黨の多けれバ意思をなる乳去あらずして

我政府に八主ち小大臣参詳をして義を舎て詳をこれを採ひ故に西ゝ隆盛板垣退助副島種臣後藤象二郎大久保利通江藤新平指南を迷られるが中ゆも西ゝ八進みいで詞ゝ言るゝやうを敢て鮮政府に於て我公使をバ侮辱あ一不敬を極めゝ必至あすくまで自主を

却つて我使に歩向ひ種々の不敬をなすのゝ者ハバ花山氏に命ぜ論旨を亭蓋也

ゝ上朝鮮政府の突深及び国民頑固を究めゝのゝか礼を失ひゝるとも見さに奏ゝたまひ事バ

○経験ゝ動靜仮令赤間の西と八ゆ加すまで手孔を為すから八向罪の師を差向

対不肖ゝ多某ゝが諸軍を指揮して敵日を殺す金陽の功を奏さんと言ふ勇ゝく迷られる夫れに勝て板垣後藤副島江

我八征韓の論を主張さ
ばしが大久保伊藤
黒田等の方々八大ひに
議論の反對して
征韓の假説を可からずとあく
とも兵を挙ら れるふ廟堂遂ふ
二派ふ別れ激論数日に渉りしが非戦
の方よ決せしも八征韓論の法参議八
人兵八
何れも
頑固
守旧
の者の
みなれ
バ敗来者
旦の人八
更なり
我人民
なども忌

朝鮮の

夫れ〳〵雄藩ふ分れる又黒田大久保西
君八朝鮮に赴かれ遂に彼の政府を
説き大ひに悔る妥協めて條約
を結びる治八年と
釜山浦に港を開き
日本人民をして居
留せしめ彼く西
洋物ふの輸出
入をなるして
西洋の通商を
厚くとのるを以て大徳八
朝命を辱めしして目的を成
遂ふ
稍ひ
する
と居
留
する我人々
の不意
の災
害を被ス
者往々

中に布
年三月
三十一日午前
十時のころ
彼の西元山津にあ
り一本寺別
院徒の留学生
蓮元憲誠同じく
を任谷覚立大
余組支店の息五
朝次郎三葉倉

社の大例吉威濱
多々吉の五人
におひて
市中の
形況を
うち眺め一
時の静を
敲せんとお
連立て出
たりしが安
道とゝ市中
を徐々と

四方の
氣色をうち眺
めやすらはよと余
念なく歩を運ばせる
杉板土橋の元小径なる
柳の蔭小韓人等が
四五十人ゐどひそみて
居しが行やら喰く
るもあらず駆れ出
て前後より五名の
者を取かこみ

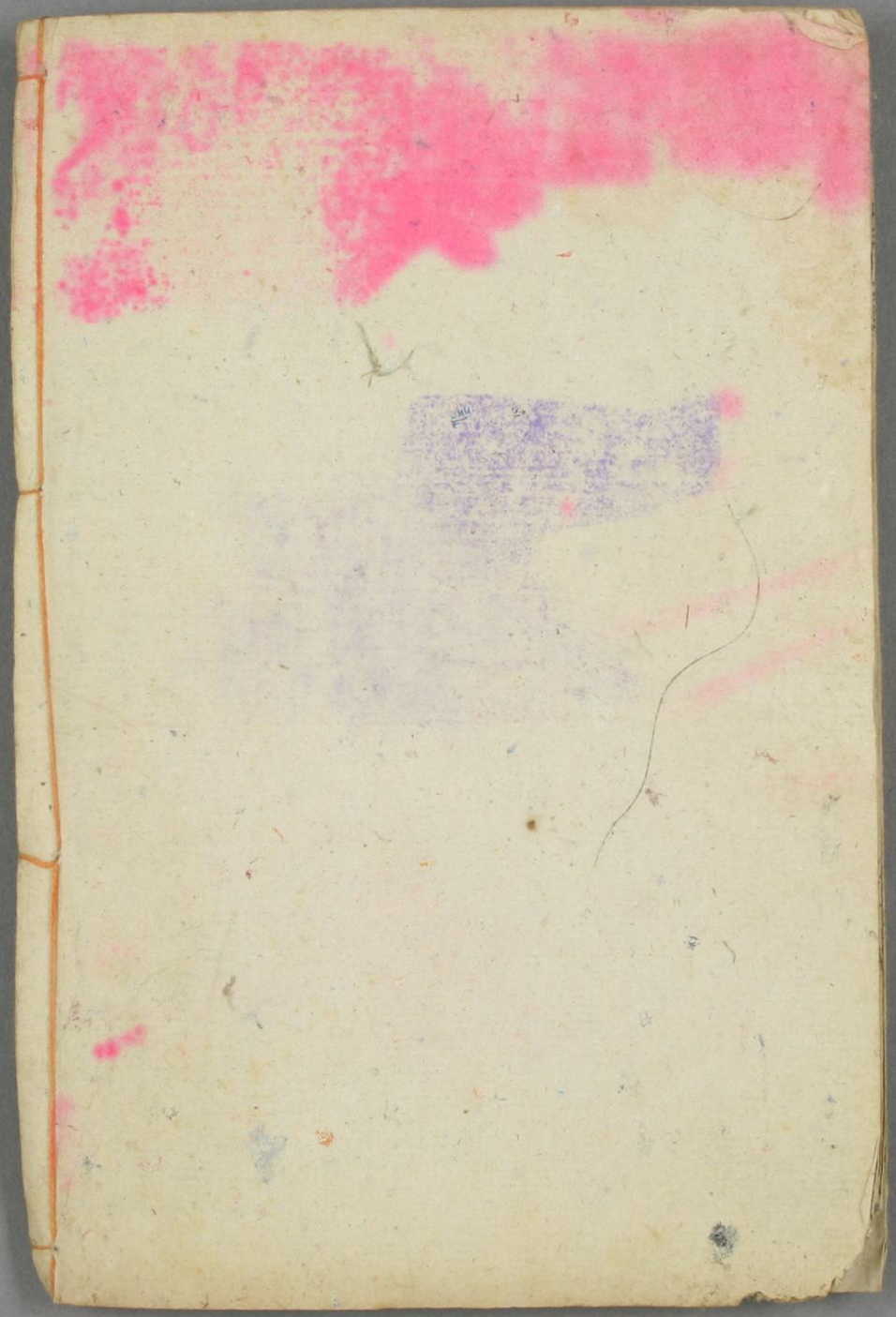
つき
在や
尾を
うち付
るに
五氏ハ大
ひふおどろ
きしが
こゝを知らぬバ怪様
つゝ多を限りふ宵む
れども言語に通せぬ
頑民奇異をもい
さてか舎釈の

姿形の傷れたる人の多近く迫りしあ
五人恐しく詞をかけ妙の面るるよ
りあまでオ罪なき我ら五名の者
ふ乱暴狼籍ぬさるや誤りあらま
ぬと詞を尽して述るふ夫れ面る詞の通し
ても黙許にてありける日
が終て後へと
引退し

日
くる族ふ
お向の何
やら類り
ふさく
や

あらバ、
ますく尾張を
発生にそ石
途宵めても
益命ーと今ハ
五人の乱場を
恐しく一生無命
ふけ出さんと暴徒
の透を伺ひて衛く
遁れ
とでなる者の生の
り迫るふそ又むや乱郎をにげ乗り
なり
が此時韓人の中ふても少くく

き
居
か暴
徒ハ乱
意を泊
たり
者るや
ちむ
様縁る人
うふ其五人ハ衛く安
堵を命一息後で居
る打もまさわや

件んの暴徒ら八間をバ動とあぐるが
吾や再び五氏の後ろより退迫う
れて共も敢も奔走あり迯へり
殺りよ援をこひぬれど爲ぎる者のあら
されバ如のハせんと狂様却り
しも暴徒ハ又も奔走あり迫り爲保
を内に投入れるが爲も五氏ハ拡へ
来くも共を和を通れ出しが雨の如く
発射る爲の矢を命からぐら
時の迯ろまる後ろノ暴徒ら八飽まで
後を追ひ来るが五名の者ハ息も切れ
手疲も諦ら受なれバ爲よ覚悟を究
めたり

010190514493